

科目No.	共催講座FT125	科目名	化学物質総合管理特論				副題	化学物質に関するリスク評価とリスク管理の基礎知識			
連携機関名	主婦連合会 製品評価技術基盤機構	水準	基礎	教室定員	40	配信定員	0	講義日時	火曜日 18:30~20:30	拠点 (開講機関)	東京・四谷(1)主婦連 (主婦連合会、製品評価技術基盤機構)
科目概要(300字)	化学物質のリスク評価、リスク管理は、安全で安心できる社会の実現に不可欠である。化学物質のリスクとは何か。そのリスクを評価、管理するとはどのようなことか。リスクを解析する科学的な手法をはじめ、その背景となっている考え方、化学物質管理制度、諸外国の状況などにも言及しつつ化学物質のリスク評価の全体像を解説する。また、化学物質評価の具体事例や化学物質管理に関する情報に触れるとともに、適切な化学物質管理に重要なリスクコミュニケーション手法等についても解説する。										

科目構成	No.	講義	講義概要(150字)	講義日	開講場所	取組み者	講師	所属
総論	01	化学物質とリスクの考え方	リスクとは何か。ISO31000によれば、リスクの意味は危険性と必ずしも同一ではない。日常生活における各種リスクを解釈すると同時に、リスクの大小、リスクの種類による受容性、リスクを理解した行動を取る困難さなど、できるだけ幅広い解釈を行ない、化学物質のリスクを考える導入部とする。	4月8日	主婦連合会 会議室 (主婦会館内)	安井 至	安井 至	製品評価技術基盤機構 理事長
	02	化学物質の リスクとベネフィット	化学物質は人間社会に多くのベネフィットを齎すが、利用の仕方によってはリスクを伴う。リスクとベネフィットのバランスが重要である。定量的な評価は難しいが、評価の基本的な考え方を解説し具体例を紹介する。	4月15日			村上 道夫	東京大学生産技術研究所
日本の 化学物質管理政策	03	化学物質管理政策	色々な化学物質が、その有用性のため身の回りに利用され、生活を快適なものにしている。他方、化学物質は種類が多く、多様性を有し、人や環境に与える影響が十分に分からないものも多い。このような化学物質を適切に管理し、安全と安心を確保するのが化学物質管理政策である。基本的な考え方や特徴を説明する。	4月22日			辻 信一	名古屋大学 グリーンモ ビリティ連携研究セン ター
	04	化審法の運用とその概要	化審法の運用における基本的考え方について、法律の概要とともに解説する。特に、法における化学物質の定義や物質区分の仕方、事業者と国の役割分担、法に基づく各種届出とその情報の活用方法について解説する。	5月13日			大西 洋平	製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター リスク評価課 先進評価
海外の 化学物質管理政策	05	欧米の化学物質管理	OECDにおける化学品管理政策の国際的調和に向けた取組やアジェンダ21を踏まえた国際的な化学物質管理への取組及びそれらを踏まえた欧米諸国の動向について概説する	5月20日			櫻谷 祐企	製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター 安全審査課
	06	アジア諸国の化学物質管理	近年、急速な経済発展を遂げているアジア諸国における化学物質管理への取組、条約をはじめとする国際的な枠組、およびそれらを踏まえたアジア諸国の動向等について概説する。	5月27日			町田 宏之	製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター 情報業務課
リスク評価	07	化学物質を評価する試験 方法	化学物質の毒性や生物蓄積性、生分解性など化学物質のリスクを評価する上で必要な試験方法について説明するとともにそれらの試験結果がどのようにリスク評価に生かされるのかについて説明する	6月3日			山口 渉	製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター 安全審査課
	08	有害性評価 (ヒト健康影響)	化学物質のヒトでの安全性を評価するには、ヒトにおける毒性発現の種類と強さを適切に推定する必要がある。通常は実験動物を用いた安全性試験を行い、その結果に基づいたヒトへの外挿が行われている。化学物質の主な毒性、発現機序や臓器特異性、種特異性を踏まえた一日摂取量の誘導法を中心に説明する。	6月10日			長谷川 隆一	製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター 安全審査課
	09	有害性評価 (生態影響)	化学物質の環境中生物への影響とその評価方法について解説する。特に水界を汚染する化学物質の毒性の実態とその試験方法、生物群集に及ぼす間接影響の実態とその評価方法について解説する。	6月17日			高橋 宏和	ライオン 株式会社 研究開発本部 環境・ 安全性評価センター
	10	構造活性手法の活用	構造活性相関手法(QSAR)は、化学物質の有害性試験データ不足を補うための手段として、近年OECD等においてその利用推進を目的とした活動が活発化している。QSARによる有害性予測のしくみを平易に解説すると共に、各国の化学物質管理における利用方法や、最近の国際的な取組について紹介する。	6月24日			山田 隆志	製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター 安全審査課
	11	化学物質の 暴露評価とリスク評価	暴露評価の基本的な考え方と、環境経由の暴露評価とリスク評価の方法について解説する。また、暴露評価とリスク管理との関係についても触れる。	7月1日			村田 麻里 子	製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター リスク評価課
	12	消費者製品のリスク評価	化学物質のリスク評価において、大気、水、土壌などの一般環境経由における化学物質の暴露以外にも、身近な消費者製品を使用する事での暴露も考える必要がある。この消費者製品を使用することに起因する暴露評価方法について解説し、実際にどのようなリスク評価が行われているのかの事例を紹介する。	7月8日			光崎 純	製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター リスク評価課
化学物質管理各論	13	化学物質に関する情報	化学物質管理は世界で進められている。日本では、化審法において点検された有害性情報がJ-CHECKから、各国の規制・有害性情報がCHRIPから公開されている。また、OECDが開発し無料で提供しているeChemPortalでは世界各国の有害性情報を一元的にデータ収集することができる。データ収集方法を解説する。	7月15日	高橋 成明	製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター 情報業務課		
PRTR制度と リスクコミュニケーション	14	PRTR制度の役割	PRTR制度は、事業者からの化学物質の排出に関する情報を国が集計して公表する制度であり、行政・企業・市民が公表された情報を元に、地域全体の化学物質の排出を削減することを旨とした仕組みである。すでに9年分の公表結果があり、PRTR制度が果たした役割について解説する。	7月22日	米野 洋平	製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター リスク管理課		
	15	リスクコミュニケーション	社会全体で化学物質を適正に管理するためには、関係者間で情報を共有し、理解を促進することが不可欠であり、それを実現する手法の一つがリスクコミュニケーションである。リスクコミュニケーションの基本的な考え方やその手法、事例について解説する。	7月29日	松崎 寿	製品評価技術基盤機構 化学物質管理センター リスク管理課		